令和6年　春季俳句講座

「第一句集を読む－師系を超えて（7）」

★第2回　髙田　正子　『おりいぶ』飴山　實

「孤絶のわざへ向かって」

のちに仙境とも呼べそうな抒情世界を作り上げた實の出発点は社会性俳句であった。欣一に兄事し、兜太と交友を深め、自己発見への道を模索する若き實の作品を読み解こう。

動画配信日時　4月23日(火)10時より

髙田正子略歴

1959年　岐阜市生まれ
1990年　「藍生」(黒田杏子主宰)創刊と同時に入会
1994年　第1句集『玩具』(牧羊社)
2005年　第2句集『花実』(ふらんす堂／俳人協会新人賞)
2010年　『子どもの一句』(ふらんす堂)
2014年　第3句集『青麗』(角川書店／星野立子賞)
2018年　『自註現代俳句シリーズ　髙田正子集』(俳人協会)
2022年8月　『黒田杏子の俳句』(深夜叢書社)
2023年3月　師・黒田杏子永眠
4月　エッセイ集『日々季語日和』(コールサック社)
6月　編著『黒田杏子俳句コレクション1　螢』(同)
8月　師の最終句集『八月』(角川書店)編集刊行
11月　編著『黒田杏子俳句コレクション2　月』
2024年1月　「青麗」創刊主宰
3月　編著『黒田杏子俳句コレクション3　雛』
『同4　櫻』

公益社団法人俳人協会評議員　NPO法人季語と歳時記の会
理事　公益社団法人日本文藝家協会会員
中日新聞俳壇選者　田中裕明賞選者　俳句甲子園審査員長ほか

飴山實（1926～2000）略歴～第二句集『少長集』まで

昭和元年　石川県小松市生まれ　生家は醤油醸造業

昭和19年　第四高等学校（現・金沢大学）理科甲類入学

昭和21年　「風」（沢木欣一）創刊　第3号の雑詠欄に初登場

昭和22年　京都大学農学部農芸化学科　発酵醸造学専攻
「寒雷」の学生たちと交流

昭和23年　「楕円率」創刊

昭和25年　浪速大学（現・大阪府立大学）助手
26年から5年ほど俳句から遠ざかる
静岡大学（30年）山口大学（44年）
関西大学工学部生物工学科（平成2年）

昭和29年　再び「風」に投句　同人（31年）

昭和34年　『おりいぶ』刊行（風発行所）

昭和36年　芝不器男を調べ始める

昭和37年　このころから作風変化
7月より「俳句」に「芝不器男伝」連載

昭和42年3月～43年9月　アメリカへ留学

昭和45年　『芝不器男伝』『定本芝不器男句集』刊行（昭森社）

昭和46年　『少長集』刊行（自然社）

『飴山實全句集』（２００３年刊）
年譜より抜粋

平成二年（一九九〇）　六十四歳

三月、山口大学を定年退職。四月、関西大学工学部に新設の生物工学科へ赴任。山口市と吹田市に住む。九月「日常身辺」（「朝日新聞」）。

＊大阪府吹田市山田西のマンションに住み、正月休み、夏休みなどの長期休暇には山口市の自宅に帰る生活が始まった。同時に同市の国立循環器病センターで治療を受け始める。

平成四年（一九九二）　六十六歳

『芝不器男句集・麦車』（ふらんす堂）刊。『蝸牛俳句文庫・芝不器男』（蝸牛社）刊。

＊一月十八日、岩井英雅、中田剛、長谷川櫂氏と京都句会が発足し、淡淡美術館（大津市）で初句会。後に飴山宮子、神蛇広、高田正子、田村奎三、併和久仁子、武藤紀子、矢野景一、吉田穂津、渡辺純枝氏らが加わる。

＊四月三日、大木あまり、千葉皓史、長谷川櫂氏とホテルパシフィック東京（高輪）の大志湯で句会。

＊五月十日、淡淡美術館で京都句会。

＊五月、山口県下関市の春帆楼でＮＨＫ「春季ＢＳ吟行俳句会」。

＊六月、「俳句文芸」（天満書房）創刊号から友岡子郷、辻田克巳の両氏と「全国雑詠合評座談会」（平成九年六月号まで毎号掲載）。

＊八月二日、法華クラブ京都店（室町）で京都句会。

＊十一月三日、義仲寺の無名庵で京都句会。

平成六年

五月、国立循環器病センター（吹田市）で腎臓の異常が見つかる。大阪厚生年金病院に移り、食事療法始まる。

八月、大阪府高槻市の神峯山寺でＮＨＫ「夏季ＢＳ吟行俳句会」。

十月九、十日、京都句会の人々と奥美濃吟行。九日、ホテル郡上八幡、十日、白鳥町の白山長滝神社、若宮家での句会。

十月、大阪朝日カルチャーで俳句講座を始める（平成九年三月まで）。

十一月十二日、泉涌寺塔頭の雲龍院で京都句会。

十二月十一日、くに荘で京都句会。

平成七年（一九九五）　六十九歳

一月三日、「朝日新聞」で「戦後５０のうた」特集。朝日俳壇、朝日歌壇の八選者が青春、老い、自然、戦争の四つのテーマで計五十の俳句、短歌を選ぶ。

二月二十七日から三月三日まで、「朝日新聞」文化面に「出あいの風景」を五回執筆。

三月、「俳句研究」三月号で「飴山實の世界」を特集。

三月、『生活とバイオ――びっくり！微生物のはたらき』（関西大学出版部）刊行。

四月、「飲酒文化」第八号「酒類の社会文化面における調査研究」（国税庁醸造試験場監修、社団法人・アルコール健康医学会発行）に「『うたげ』としての日本の詩歌と酒」寄稿。後に私家版の小冊子に。

四月、「俳句研究」の企画で吉野山吟行。

五月五日、梨の木神社社務所で京都句会。

六月二十四日、新島会館会議室で京都句会。

九月三日より、「朝日新聞」歌壇俳壇面の「うたへの招待」執筆（平成十一年四月四日まで六回執筆）。

九月二十四日、新島会館会議室で京都句会。

十月、第五句集『花浴び』（角川書店）刊行。

十月二十八日、泉涌寺塔頭の雲龍院で京都句会。

十一月、ＮＨＫ「秋季ＢＳ列島縦断俳句大会」で山口県萩市の大照院から中継。

十一月二十三日、つじの家（水尾）で京都句会。

十二月、食事療法を止め、自宅で腹膜透析を始める。

平成八年（一九九六）　七十歳

一月二十日、しづか楼（大津市堅田）で京都句会。

二月十日、梨の木神社能舞台で京都句会。

（飴山宮子編）

飴山實『おりいぶ』抄

①現代俳句全集五（立風書房１９７８年刊）３４句／３８１

秋山のぬくさしづけさ背をつたふ
掌によしきりの卵のせて来ぬ
熱のからだはどこも脈うつ青林檎
鵙の巷二人の盲腕で寄り
冬月と菜屑うかべて川せかれ
野葡萄へ汽笛鳴らして帰りけり
水仙やカンテラに似て灯はともり
蹄鉄屋朝の火花を葵まで
梅の下駅夫煤けて写しあふ
基地で無数の春泥の畦ぶち切られ
椋鳥あふれゆき保線夫らまた残る
気球より没り日が赤し心中次ぐ
梅固し女工米とぐ夜更けては
受験生肩に雲脂積み空に飛機
ガスタンクがスト告げ海かけて花曇り
花吹雪寸鉄帯びず父となる
花林檎貧しき旅の教師たち
藤棚へ老土工毬投げかへす
夜目に白き畦の石灰海鳴りをり
授乳後の胸拭きてをり麦青し
藁屋より蝶出て広き塩害地
襁褓の隙空母仮泊の暑い海
菖蒲湯の底まで夕日子と沈む
吊橋に夫婦が揺れてゐる旱り
妻病みし曇日の子に蜆蝶
灰青色の海へ桃投げては泳ぐ
吊橋に夫婦が揺れてゐる旱り
送電塔田を抜き屋根裏の中学生
赤ン坊を尻から浸す海旱り
陶土工蜩なけば胸を掻く
茄子の紺緊り野良着の中学生
冬の瀧腋のラヂオに笑ひ声
寒流や能登は北から灯りだす
温泉へゆく百姓に霰さわぐ

②現代俳句の鑑賞１０１（新書館２００１年刊）

飴山實

あめやま みのる 昭和元年、石川県生れ。勤労動員中に『芭蕉七部集』を読み俳句を始める。無所属。句集のほか、『芝不器男伝』『季語の散歩道』など。平成十三年没。

てのひらに葭切の卵のせてきぬ

小鳥死に枯野よく透く籠のこる

うつくしきあぎととあへり能登時雨

釘箱から夕がほの種出してくる

花の芯すでに苺のかたちなす

金魚屋のとゞまるところ濡れにけり

飯粒のこぼるゝことや大暑の子

（『おりいぶ』昭34）

（『少長集』昭46）

あを〳〵とこの世の雨の帚草

この句の中で「この世」という言葉は、どう働いているのだろうか。「あを〳〵とこの世の雨の帚草」という句は、ただ「あを〳〵と雨の帚草」というのとどう違うのだろうか。

帚草とは、その名の通り帚にする草である。帚木ともいう。夏の頃、細かく枝分かれし、柔らかな葉をつけて、こんもりと丸く茂る。大きいものは一メートルを超える。やがて、小さな花を咲かせ、実がなる。これがトンブリ。秋になると、葉や茎が赤や黄に染まる。枯れて葉を落としたところを刈って束ねて帚にする。

詠まれているのは、夏の緑の帚草である。「あを〳〵と雨の帚草」といえば、雨を浴びて、水玉を散りばめたような帚草の姿が目に浮かぶ。これに「この世の」という言葉が割って入ると、

【参照】飴山實全句集（花神社２００３年刊）

河原紋白

昭和二〇年―二五年
六六句

終戦、勤労動員より帰り正常の二学期はじまる

秋山のぬくさしづけさ背をつたう

以上昭和二〇年

水仙の水かえて朝の炭火匂う

水そのまま胃に降りてゆく寒さかな

玻璃暑し為すことあまたある机

掌によしきりの卵のせて来ぬ

金沢千日町に下宿

汗臭きシャツに秋風四方よりす

青き林檎青く画きつつ哀しかり

京都にて

煙草火の大きくなりぬ霧の街

☆自作ノート（現代俳句全集五）

自作ノート

飴山　実

秋山のぬくさしづけさ背をつたふ

昭和二十年作。その前の年に金沢の高等学校の理科に入った。ひと月勉強して、すぐに小松飛行場の建設に動員された。秋から半年学校にもどると、また名古屋の鳴海にあった工場にでかけた。終戦までの半年ちかく、飛行機のエンジンをつくった。飛行場もエンジンも特攻隊が使っていることをその頃には聞いていた。文科の友人たちがつぎ〳〵に出征し、徴兵猶予がなくなった理科生も落第をかさねた連中は目立ってまわりからいなくなっていった。徴兵検査のとき、大学は精密工学へいくつもりだと答えたので、航空隊の整備兵にまわされることも決まった。上級生や友人の戦死もよく耳にするようになった。風景全体が実に透明に感じられてならなかった。そんな中で俳句をはじめた。透明感がきわまっていたから、詩や短歌よりもすのつまった俳句が呼吸に合った。手元には改造文庫の『俳諧七部集』しかなかったが。鳴海の丘から名古屋の空襲が見え、工場にも焼夷弾がふった。休暇をもらって帰省する晩に豊橋が燃えた。米原に辿りついたが福井も爆撃されて北陸線がしばらく動かなかった。食べられる何もなかったので、近くの寺へ小堀遠州のつくった庭を見にいった。夏草が茂っていた。福井からは焼けだされて真黒な人たちが汽車にのってきた。結核の青年とそれを抱きかゝえた母親が前の席に坐った。

戦争がすんで最初の講義は、これで本が読める、と涙する先生のドイツ語からはじまった。大学も、醤油をつくった父の暖簾をつぐ意味で発酵醸造学にすすんだ。まだ、歳時記はなか〳〵手に入らなかった。

掲出の句には、それ以後の私の発想の原初みたいなものがある。この肌あいを忘れて理に走ったために失敗したことが多い。「掌に」の句は私の表現の原初か。いまの好みからは「てのひらに蔑切の卵のせてきぬ」としたい。これから「冬月」の句まで二十一年作。

基地で無数の春泥の畦ぶち切られ

飴山實の思考の過程『おりいぶ』から『少長集』へ

◇１９５６の俳壇　「楕円率」昭和31年12月

（新しい精神が新しい詩法を要求する、そうした考え方で現代俳句が今どう変わろうとしているか。定型・リズム・季語を不問のものとせず、考えていくべき）

あくまでも伝統を生かして継承するために伝統詩法の機能を今日の精神で解明したり、不足なものを備えることがぼくらの仕事。

◇リズムについて　定型試論ノート「風」昭和32年8月

定型をもっと精密に分析し、未知の強靭な本質を探り出す。

◇現代俳句の汚れ　「雲母」昭和34年4月

「コミュニケーションの希薄化」を指摘

いたずらに新を追う前にデッサンや語法語感に息をひそめることも必要。

伝統とは俳句のそのものにあるオリジナルな方法である。

◇新しい抒情について　「馬酔木」昭和35年9月

作者の内面が新しくなっても、それに並行して抒情が新しくなっていくとはいえない。表現の技法が伴って新しくならなければ。

飴山實『おりいぶ』を読む

編年体／現代仮名遣い／３８１句

終戦、勤労動員より帰り正常の二学期はじまる

秋山のぬくさしづけさ背をつたう

掌によしきりの卵のせて来ぬ

金沢千日町に下宿

汗臭きシャツに秋風四方よりす

学制改革の声を聞きつつ四高卒業

机椅子鉄色をしてかじかめり

結婚　三句

野葡萄へ汽笛鳴らして帰りけり

妻となる娘野葡萄実るらし

小さき町にコスモス溢れ鳴る汽笛

基地で無数の春泥の畦ぶち切られ

気球より没り日が赤し心中次ぐ

長子誕生

花吹雪寸鉄帯びず父となる

菖蒲湯の底まで夕日子と沈む

吊橋に夫婦が揺れてゐる旱り

赤ン坊を尻から浸す海旱り

寒流や能登は北から霰さわぐ

甘美な抒情と、現実直視と、虚無的な心象と。それらの間を行ったり来たりした不安定きわまる十五年間の詩屑をすてるべく、『おりいぶ』をつくった。自分の詩の原点をやみくもにさぐることで精一杯の年月であった。

【付録】

『少長集』（１９７１年自然社）

冬始まりの四季順／旧仮名遣い／１１９句

小鳥死に枯野よく透く籠のこる

うつくしきあぎととあへり能登時雨

釘箱から夕がほの種出してくる

花の芯すでに苺のかたちなす

金魚屋のとゞまるところ濡れにけり

飯粒のこぼるゝことや大暑の子

手にのせて火だねのごとし一位の実

『辛酉小雪』（１９８１年卯辰山文庫）

『次の花』（１９８９年角川書店）

『花浴び』（１９９５年角川書店）